

東海村の今と昔の姿を写した写真展の開催(期日▶8月1日(土)～30日(日)、場所▶村立図書館)に伴い、その懐かしい写真をちょっとだけご紹介していきます!

向渚と久慈漁港(昭和20年代)



かつて向渚^{むこうなぎさ}は東海村域だった。久慈川の河口は黒潮によって北に蛇行し、幅120メートル、長さ1.5キロメートルもの長い砂州(向渚)を作った。そのため久慈川は排水が悪く、大雨が降るとたびたび氾濫し、石神外宿や竹瓦・亀下・豊岡の集落を洪水で困らせた。砂州を切って久慈川を直流させる「河口切り」は当時最も有効な手段だったが、水位が下がって久慈漁港から出漁できなくなるので、兩岸の住民はそのたびに対立した。そこで東海村は、日立港築港に当たり、久慈川直流等を条件に、向渚を昭和46年末に日立市に割譲したのである。

ふるさと歴訪
〜歴史を再発見〜

常陸平氏・白方氏の成立を考える

茨城大学教授

高橋 修

「常陸大掾伝記」は、平将門を倒した平貞盛の弟・繁盛の子孫である常陸平氏の流れから吉田一族が分家する様相を、次のように記述しています。

吉田三頭ハ、吉田・石川・馬場也、(中略)吉田ノ太郎盛幹ノ嫡子、吉田太郎、大戸其嫡也、(中略)白方・太良崎・勝倉・市毛・武田・堀口・道理山・藤佐久等ハ吉田族也、

これに伴う系図にも、あたかも樹木が枝分かれして、父から息子たちへと子孫が繁栄したかのように表されています。その後も惣領を中心に分家した庶子たちが血縁的に団結して強固な武士団結合が形成される道筋を示しているようにも見えます。かつてはこうした樹形図のような武士の系図がそのまま信用されてきましたが、どうも現実とは異なるようです。近年の中世史研究の成果に照らして考えると、父親が持っていた郡規模の所領を子どもたちが分割相続して一族が枝分かれしていったわけではなく、実際には郷や村の有力住人が、開いた田畠(私領と呼ばれる)やさま



豊受皇大神宮

東海村に拠点を置いた白方氏の成立にも、おそらくそのような背景があったのでしよう。吉田氏から分家していく武士たちの苗字の地は、おおむね那珂川北岸のひたちなか市内に分布していますが、吉田広幹の子・興幹に始まる白方氏の所領・白方郷は、それらとはかなり距離を置いています。故志田諄一氏は、白方氏について、豊受皇大神宮の境内辺りに居館を構え、東に隣接するため池の灌漑を利用して、沖積低地の開発を進めた主体と評価していますが、やはり近年の研究成果に照らせば、もう少し水陸の交通や商品流通との関係を重視して、その成立を考えた方がよいかもしれません。いずれにせよ白方氏の成立については、文字で書かれた史料が何も残されていませんから、今も多くは不明のままです。